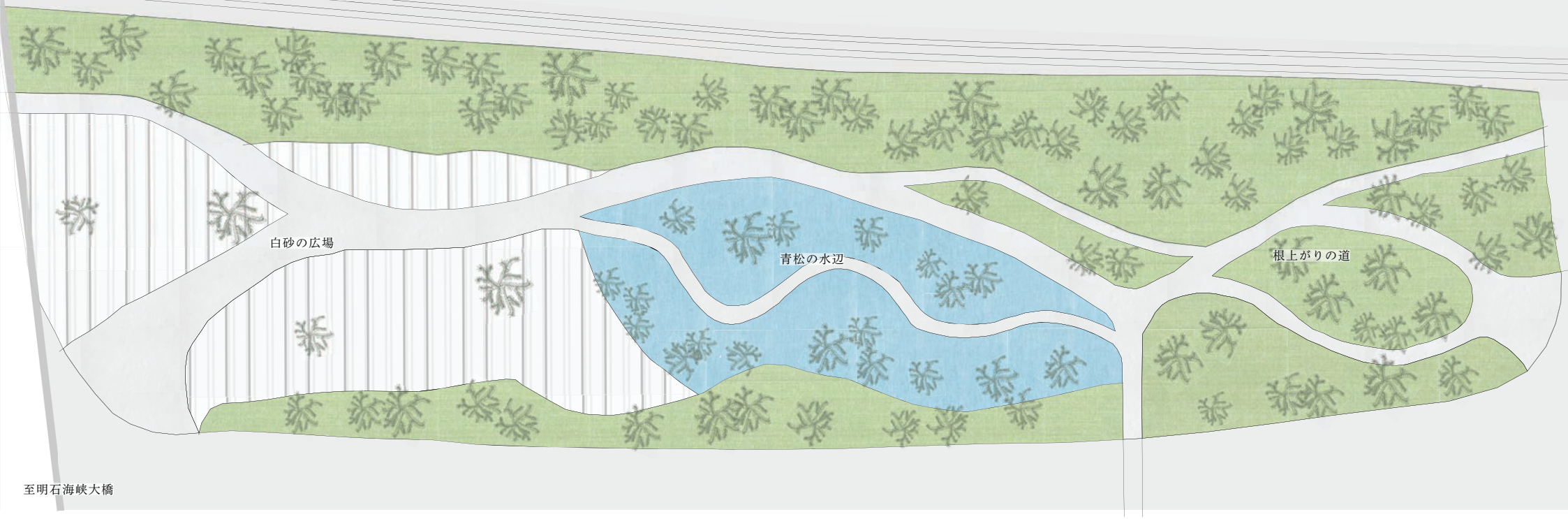
橋松乃寿 きょうしょうのじゅ

-橋のそばに生き続ける舞子の白砂青松-

兵庫県神戸市、淡路島を望む白砂青松の舞子浜はかつて天下の名勝と言われていた。
その姿は歌川広重の六十余州名所図会にも描かれた。
志賀直哉は『暗夜行路』の中で「塩屋、舞子の海岸は大変美しかった。…白い砂浜の松の根から長く網を…」と車窓の風景を書いている。

ところが現在の舞子公園は周辺の開発や明石海峡大橋の開通によってかつての白砂青松は失われている。
一方現在の舞子は淡路島との玄関口、明石市や神戸市の中間にもあたり、さらなる人々の交流の拠点となり得るポテンシャルがある。
現在の松林を多様な人々の憩いの場、交流の広場に変えて、いつまでも続く白砂青松を目指す提案だ。



歴史 History

県内初の県立公園として誕生した舞子公園は、古くから白砂青松の海岸で知られたが、開発や明石海峡大橋の建設などによって景色は変化してきた。

～明治時代

Ⅰ.天下の名勝、舞子浜

江戸時代の頃から松の名所として知られた舞子浜。
浜と松が一体となった風景は日本の原風景として認識されていたらしく、歌川広重の『六十六余州名所図会』や、播州名所巡覧図絵にも播磨国を代表する名所として描かれた。

1900年

Ⅱ.初の県立公園、舞子公園

国有地であった舞子浜を兵庫県が無償貸与を受けて明治33年（1900）に初の県立公園として舞子公園は誕生した。
当時は公園らしい施設などはなく、老松や根上の松、海峡の美しい風景があるのみだった。

1988年

Ⅲ.明石海峡大橋の建設と海岸線の変化

1988年、明石海峡大橋の建設に伴い、海岸線が大きく変わった。
多くのマツが移植され海に面していた松林も内陸になった。

1980年頃の海岸線

～現在の海岸線

～現在

Ⅳ.現在の過密な松林

開発によって松林が衰退する時期もあったが現在は概ね回復している。ところが過密による日照不足や生育の行き詰まりが懸念されている。
また、松林にあるのは主に散歩道やベンチのみで、さらにやや薄暗いためか滞留する人の姿はあまり見られない。

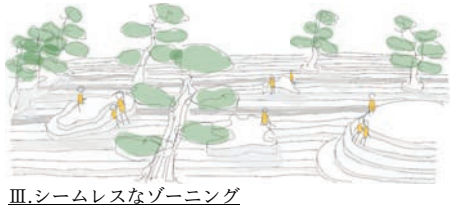
要素 Key Elements

景観の復興、利用の促進、空間の柔軟性を軸にこれからを考えてみた。

Ⅰ.間伐・根上がり松の再生、舗装による景観復興

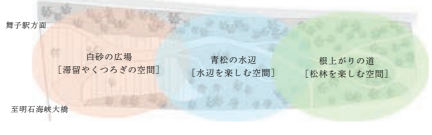
Ⅱ.ファーニチャーやベンチの配置により滞留を促進

波で削れた岩や海岸線をイメージしたファーニチャーを計画した。人々の滞留を生み観光客や地域の人たちが思い思いに白砂青松を感じながら過ごす。



Ⅲ.シームレスなゾーニング

駅からのアプローチや橋との位置関係をもとにゾーニングした。



提案 Proposal

三つのエリアにゾーニングし、根上松の再生や老松の保護を続けるとともに、イベントや公園内でお店を開いたりするための空間的余白を持たせた。
10年後、20年後、その先も白砂青松があり続けるためには、人々の賑わいや参加が不可欠だ。

エリア1.白砂の広場

JR舞子駅に最も近い側のエリアである。ベンチや大きな石などを配置してくつろぎやすい空間にした。
またステージを設営したり、キッチンカーが出入りできるように、広めに舗装された広場を計画する。
舗装はかつての白い砂浜に押し寄せる波の様子をイメージしている。

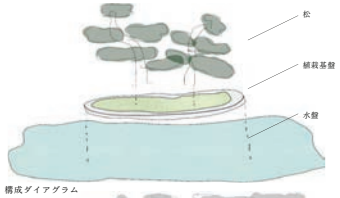
ファニチャーの設置

舗装パターン

キッチカーの出店

エリア2.青松の水辺

歌川広重の『六十六余州名所図会』に描かれた風景を再現する計画である。
コンクリートの護岸や、海岸線の変化によって失われた景観を復興し、舞子の松林の素晴らしさを後世に継承していくための要となるエリアだ。



構成ダイアグラム

歌川広重が描いたかつての舞子浜をイメージ

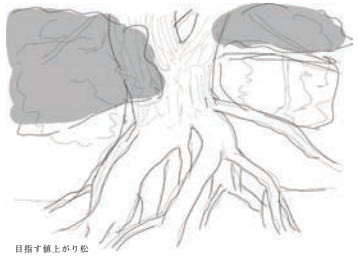
エリア3.根上がりの道

長い年月をかけて地域の人々と共にワークショップや整備活動を通じて根上がり松の再生を目指す。
失われた景観を取り戻し、舞子の人々の魂がこもった空間として未来にも受け継がれていく。

2024年　根上がり松を知るためのレクチャー
　　根上松再生の盛り土ワークショップ

2054年　生育の悪い松の移植
　　盛り土の撤去

2098年　明石海峡大橋開通100周年
　　根上がり松と共に記念撮影


目指す根上がり松